

第10章 誓願の発心の学処 (Training in Aspiration Bodhicitta)

まずは復習から

- I. 帰依して律儀を受ける [Foundation](#) (第8章)
- II. 発心の自体 [Essence](#) (ここから第9章)
- III 発心の区別 [Classification](#)
- IV 発心の所縁 [Objectives](#)
- V. 発心の因 [Cause](#)
- VI. 発心を受ける対境 [From Whom You Receive It](#)
- VII. 菩提心を受ける儀軌 [Method\(Ceremony\)](#)
- VIII. 利得 [Beneficial Effects](#)
- IX. 菩提心を捨てたことの過患 [Disadvantages of Losing It](#)
- X. 菩提への発心を喪失することの因 [The Cause of Losing It](#)
- XI. 菩提心を回復する方便 [The Method of Repairing](#) (9章の終わり)
- XII. 学処 [Training](#) (第10章と11章の最初)

菩提心の摂受 [the cultivation of bodhicitta](#) は

第8章の帰依から始まって、12の構成で詳しく説明しています。

今日は、その12番目のところの始まりです。

XII. 学処 [Training](#) (第10章と11章の最初)

「第10章誓願の発心の学処」のはじまり「発心してからの学処」から。

発心してからの学処

正覚に発心してからの学処は二つ、

- 1) 誓願の発菩提心の学処と、
- 2) 発趣の発菩提心の学処です。

(英訳)

XII. Training.

After cultivating bodhicitta , there are two types of training.

- A. training in aspiration bodhicitta, and
- B. in action bodhicitta.

学処 : training

誓願の発菩提心 : aspiration bodhicitta

「菩提心を得たい」と願う心

発趣の発菩提心 : action bodhicitta

「そのために菩薩行に入る」と実際に行動すること

発心 ①菩提心をおこすこと。発菩提心とも。②思い立ってなにかことを始めようと思うこと。

発菩提心 (ほつぽだいしん) 悟りを求める心をおこすこと。

誓願 ①誓いを立てること。②仏・菩薩が衆生救済の誓いを立てること。また、その誓い。

発趣 (あるものに) 向かって進んでいく。行動を起こして向かっていく。または、修行を始める。

(例文 仏教語大辞典より)

誓願の発菩提心 と 発趣の発菩提心 のお経

【菩提心をおこす】

われを恨む怨敵も 妨害する邪氣も

解脱と全智の障害となる一切の者たちも

虚空と等しき母なる一切有情なれば樂を得んことを 苦を離れんことを

すみやかに無上正等菩提宝を得んことを

それゆえ仏陀にならざる間は身語意三門の善業を積まん

死に至らざる間は身語意三門の善業を積まん

今より明日のこのころまでの間は身語意三門の善業を積まん

誓願の発菩提心の学処

そのうち、第一を説明するには、

撰義は、

「有情を見捨てないことと、
その心の利徳を念ずることと、
二つの資糧を集積することと、
たびたび菩提心を修治することと、
白黒の八つの法を取捨すること

一〔それら〕五つにより、誓願の学処は包撰されている。」というのです。

それらもまた

第一は、その菩提心を喪失しない方便です。

第二は、その菩提心が損なわれない方便です。

第三は、その菩提心の力を生じさせる方便です。

第四は、その菩提心が増長する方便です。

第五は、その菩提心を忘れない方便です。

菩提心を得たいと願う心の学びとして
入ってくるものは五つ。

今日はこの五つのうち
からの三つを学びます。

撰義 : summary : 概要、要約。

撰(しょう) ①含むこと。②納めること。

③属していること。④正すこと。⑤救いとること。

義 ①意味。わけ。④仏の教説。はたは、教義・内容。

⑤本来の意義・目的。⑧阿弥陀仏の救いのはからい。(例文仏教語大辞典より)

誓願の発菩提心の学処		方便
第一	有情を見捨てないこと	その菩提心を喪失しない方便
第二	その心の利徳を念ずること	その菩提心が損なわれない方便
第三	二つの資糧を集積すること	その菩提心の力を生じさせる方便
第四	たびたび菩提心を修治すること	その菩提心が増長する方便
第五	白黒の八つの法を取捨すること	その菩提心を忘れない方便

その菩提心を喪失しない方便を

説明

有情を見捨てないこと

そのうち、第一：「有情を見捨てないことを学ぶ」という、その菩提心を喪失しない方便を説明するなら、

『無熱腦所問経』（訳註1）にもまた、

「菩薩〔大士〕は一つの法を具えたなら、一切相の最上を具えた仏陀の諸法を摂受するのです。一つの法は何かというと、〔一切〕有情を見捨てない〔一切智者の〕心です。」と説かれています。(H67a)

それもまた、或る有情たちが私に対して道理でないことをしたので、私は彼に対して心を隔ててから、親切さを離れて、以降、あなたを益するときに生じても、そうしない。(V147) 害を止めるときが生じても、止めないという心が生ずることが、有情を見捨てることです。

それもまた、一切有情を見捨てないことを言うのか、または一人ほどを見捨てないことをも言うのか、というなら、

一切有情を見捨てたことは、〔自利中心の〕声聞・独覚の二種類はそうではないし、〔肉食する〕鷹と狼にも起こらないのです。よって、一人の有情のみを見捨てたことによってもまた、〔修行の一座の時間・〕更の度量（訳註2）の中に対治が至らなかったなら、菩提心を喪失するのです。

そのように有情を見捨てるし、〔菩薩以外の声聞・独覚など〕他の学処に住して菩薩だと承認することは、きわめて不合理です。例えば、ただ一人の子を殺してから子の物を蓄えるのと似ています。よって、有情〔のうち、〕私に益してくれる者たちに対して、菩提心をどこに喪失するのでしょうか。害する者に対しては喪失する疑いがあるので、彼に対して特別に悲を生じさせることにより、益・楽を成就すべきです。これが、勝れた人たちの法のあり方です。すなわち、（訳註3）「益してもらった報いに害したなら、また報いは大悲により償う。ジャムブ州の最上士は、過ちの報いも善によって返す。」と説かれています。

訳註2より 昼を三分、夜を三分したようなものをいう。またそれが転じて、修行時間をいう。

三十七の菩薩行

関連文献

暇満の舟なる人身得たからは 自他を輪廻の海より救うため

昼間も夜も心を散らさずに 聞思修する仏子菩薩行 (1)

すべての苦悩は自利の望むゆえ 円満諸仏は利他より生まれたり

それゆえ自利と他者の苦しみを 交換するのが仏子菩薩行(11)

『翻訳者ノート 63. 解脱の宝飾 第7章 p141 慈と悲』より

「寂静の安楽に執着する」というのは、一切の苦を逃れて永遠の安楽の中で暮らそうとすることですが、これはやはり一種の迷いで、別の苦を生み出すことになります。すなわち、自分自身の涅槃だけを願って、他の者の涅槃を願わないので、他者を利益することができません。これを「劣った乗」と呼んでいます。「自己の利のために…」という偈文は、翻訳があまり正確でないように思いますが、「自己の利のために他者の利を犠牲にする。しかしこのような方法で自利を求めるなら、自利は最高のものになる」ということで、自己のために他者を犠牲にしているかぎり、ほんとうの利他はおこりえず、いつまで経っても利他行は不徹底だということです。

そうだとすると、なにはともあれ自利はカッコに入れておいて、まず利他から追求すべきだとわかります。

『悟りへの階梯』より

「自他を交換すること」ということと「自己を他者とし他者を自己としよう」と言って説かれたことは、他者について私だと思ったり、彼の眼などを私だと思ふ知を修治することではありません。自己を大切に取らえる知と、他者を軽視しざる知の二つの位置を交換し、他者を自己のように大切に取らえるし、自己を他者のように軽視しざる知を、生じさせるのです。ゆえに、自己の楽と他者の苦を交換すると説かれていることもまた、自己を大切に取らえることを敵と見て、自己の楽を重視することを遮るし、他者を大切に取らえることを功德と見て、他者の苦を軽視しざることを遮止して、それを除去することを重視するのです。要するに、自己の楽を顧みないで、他者の苦を除くために出発するのです。

『ガルチェン・リンポチェ法話集1 修行の道』 p 3より

p 3

利他の心で我執を打ち壊さなくてはなりません。それを長い時間かけて修習していきます。利他心は氷を溶かす熱です。我執が減ると利他心が増します。利他心が増すと智恵が増します。他を利益しようと思えば、たとえば外のレベルでも科学が発展します。世界や国の人を助けたいと思えば、外のレベルの智恵が増し、人を幸せにする方法が見つかります。まず理解しなければならないことは、利他心は自らを最も利益し、我執は自らを最も害するということです。

p 10

いま、無始爾来輪廻で積んだ罪と言いましたが、輪廻はいつ始まったかと言いますと、「私」という概念、つまり実在しない「私」の存在を信じたことから始まりました。私たちはいつも「私」が実在すると考えます。「私」が苦しむ、「私」のもの、など、「私」、「私」です。この概念によって多くの把握と執着が起こります。これを積むことによってカルマの習気が作られます。

カルマの習気は、たとえば映画を見て、実際に何かが起こっているように思うのと同じです。映画の中で誰かが喋っているのは、実はたくさんの静止画を重ねたものです。これらの画をまとめて映すと、まるで動いているように見えますが、実は幻なのです。ですが、自分で作っていることを理解しないと、カルマへの恐れが生じませんし、悪行を懺悔する方法が分かりません。そうすると、いつでも「私」が起こります。

すべての習気は「我」「私」の観念からきています。この「私」に気がつく必要があります。「私」の観念さえなければ、究極的に一切は空です。ですから「私」と利他心とを交換すれば、無始爾来の罪業が浄化されます。

p 15

いつも慈悲を育てるようにと申しておりますが、特に悲心を育てるにはどうすればよいか、ジクテン・スムゴン大師が説いておられます。これはディクン・カギユ派特別の教えです。どう特別かと言いますと、真っ先に、「われを恨む怨敵」などに対して慈悲を育てるところです。他の系譜では、まず母なる有情を自分の親と考えて慈愛を育てますから、そこが違います。育てるのは同じですが順番が違います。これはとても重要です。というのは、どれだけの慈愛を本当に持っているか、自分への試験になるからです。

p 18

敵への悲心を育む方便は、人によって異なります。ある人は、敵への慈悲を育てなければならぬと理解しただけで、それができます。またある人は、「今はまだできないけれどもそうしなければならぬ」と知り、「敵への悲心を起こしたい」と願います。これが**発願の菩提心の基礎**です。

p 19

菩提心が本当に尊いものだとして理解し、「まず敵に対して慈悲を育てなければならぬ」とはっきり理解したならば、**発願の菩提心**があなたの心相續に生じます。

p 20

「ブツダにならざる間は身語意三門の善業を積まん」、これが菩薩戒です。「菩提に至るまで決して菩提心を忘れませんように」という祈りです。この約束を守るなら、来生でどこに赴こうとも、菩提心はあなたのもとに留まります。また帰依戒の文脈でも、菩提心は真の帰依処です。心に慈愛があるなら、カルマによって畜生に生まれても、美しい姿と声をもつ心地よい動物に生まれるでしょうし、死んだ後もその肉が他の衆生の役に立つでしょう。たとえ畜生で

も、あなたは他の衆生を利益しその衆生の樂の因となります。また人間に生まれるならば、みんなに喜びを与える人になるでしょう。困難に遭わず恐れもないでしょう。

p 86

最初に起こるのは利他心で、悲心が育まれる時に我執が消えます。まず悲心が完成して、それから我執が浄められますので、「ちゃん・ちゅぷ」の順は「ちゅぷ・ちゃん」なのです。

いずれにしても、無量の慈愛が生じた時に、このような悲心が見られます。そしてこのような悲心は日常生活の中にいつもあり続け、氷の塊を溶かします。何度も慈愛の徳を考えて、心に落とし込んでください。

菩提心が損なわれない方便を説明

利徳を念ずること

第二：「発心の利徳を念ずることとを学ぶ」という、菩提心が損なわれないその方便を説明するなら、『菩提道灯論』（訳註4）にもまた、

「そのように誓願の心を生じたことの功德（H67b）なるもの、それは『荃莊嚴經』（華嚴經入法界品）にマイトレーヤが〔善財に対して〕説明している。」

などと説かれています。（V148）

それもまたその『〔荃莊嚴〕經』（訳註5）に、発心の利徳を二百三十ほどの比喩を通じて説かれているが、それらすべては利徳の大きな四つの門にもとまっているのであると、説かれています。

それもまた、（訳註6）「良家の子よ、菩提心は、仏陀の一切法の種子のようなものです。貧窮すべてを除去するので、毘沙門天のようなものです。」などということは、自利が生ずる利徳です。

（訳註7）「〔世の〕衆生すべてを救護するから、住処のようなものです。〔世の〕衆生すべてが依るので*、依処のようなものです。」などということは、利他が生ずる利徳です。

（訳註8）「煩惱の敵に勝利するので、槍のようなものです。」「苦の樹を伐るので、斧のようなものです。」などということは、所対治分すべてを断つ利徳です。

（訳註9）「思惟すべてを完成させるので、妙瓶のようなものです」「欲することすべてを成就するので、如意宝珠のようなものです。」などということは、能対治分すべてが成就する利徳です。

〔以上の〕そのような利徳それらすべてを念じたことにより、利徳をもったその菩提心を重視し、最上だと取ることになります。

そのようになったことにより行持〔・実践〕して、その心が損なわれないよう護〔りそだ〕ることになるのです。

よって、利徳それらを常に念ずるべきですし、たとえ〔修行の一座・〕更の度量の中においてもまた一回、念ずるべきです。

所対治分 : the unfavorable conditions

《「対治」は煩惱・迷いなどを打ち破る、断ち切る、除く、おさえつける、などの意》

対治されるもの。対治されねばならない、修行の障礙となるもの。

所 ①対象。主観に対する客観。

能対治分 : favorable conditions

能 ①他にはたらきかけること。能動。またははたらきかけるもの。主観。

利徳の大きな四つの門 as four categories	発心の利徳 beneficial effects	譬 喩 Similes
①自利が生じる	菩提心	仏陀の一切法の種子のようなもの
	貧窮すべてを除去	毘沙門天のようなもの
②利他が生じる	衆生すべてを救護する	住処のようなもの like a shelter
	衆生すべてが依る	依処のようなもの like ground
③所対治分すべてを断つ	煩惱の敵に勝利する	槍のようなもの
	苦の樹を伐る	斧のようなもの
④能対治分すべてが成就する	思惟すべてを完成させる	妙瓶のようなもの
	欲することすべてを成就する	如意宝珠のようなもの

関連文献

『ガルチェン・リンポチェ法話集1 修行の道』より

p 1

どの宗教の目標も、最終的にはたったひとつです。それは衆生の心に安樂をもたらすことです。そのためには楽の因を作り、苦の因を取り除かなくてはなりません。仏教は多くの宗教の中のひとつで、釈尊が創始されました。釈尊は八万四千もの法を説かれましたが、ご自身で、「私は世に合わせて多くの法を説いた。言葉は異なっていますが、その意味はひとつである」とおっしゃっています。ですから、私たちが学び育てなければならないことは、たったひとつ、

慈愛です。慈愛を持つことが楽の因です。慈愛があれば天人界で一時的な楽を得ます。慈愛だけが究極的に菩提を成就する因です。すべての楽のたったひとつの因は菩提心です。

『ガルチェン・リンポチェ法話集2 清浄の道』より

p 65

では、楽を道とするとはどういうことでしょうか。恵まれた暮らし、家族、健康、財産、あなたにそれらすべてが備わっているのは何故でしょうか。利他心、世俗菩提心のおかげです。そう考えれば心が動くでしょう。「私は今よりもっと修行をしなければ。菩提心を修して増大させなければ、忍耐を増やさなければ」と思うでしょう。このように楽と苦を道とします。『三十七の菩薩行』にはっきりと説かれています。

『ガルチェン・リンポチェ法話集2 清浄の道』 p 76より

「我」「私」の観念がある限り、たとえ悲心があっても、それは限られた小さなものです。では大悲はというと、その時は氷が完全に溶けています。氷は溶けながら水と親しんでいき、最後に水とひとつになります。それと同じように、悲心を育てることで私たちは有情と親しんでいき、そのようにして有情を利益するのです。ですからミラレーバは、悲心を育てれば「利他を成就するだろう」と説かれました。

ミラレーバは本当に少しのお言葉で、とても深い意味を説いておられます。是非これを覚えて、自分の心に应用して、自分にどれぐらいの悲心があるだろうかと問うてみてください。自分の心を観察できるのはあなただけです。ですから正直に自分を観察して、悲心がどの程度か見てください。それに基づいて、どれぐらい見解を悟っているか理解することができます。この理由で、自分への理解が大切です。

菩提心の力を生じさせる方便を説明

二つの資糧を集積すること

第三：「〔福德と智慧との〕二つの資糧を集積することを学ぶ」という。

菩提心の (H68a) 力を生じさせるその方便を説明するなら、(V149)『菩提道灯論』(訳註10)にもまた、

「福德・智慧の自性の資糧を円満に完成させる因は〔神通を生じさせることだと一切諸仏は認めておられる。〕」などと説かれています。

それもまた、福德の資糧は、**十法行**と**四摂事**(訳註11)などこれら方便の分です。智慧の資糧は、それら〔方便の分〕が全く**三輪清浄**(訳註12)だと知ることなどこれら智恵の分です。

そのように二つの資糧を集積したことにより、自相続に菩提心の力が生ずるのです。よって、その〔福德と智慧の〕二つの資糧を常に積むし、たとえ短い一つの真言を誦えることもまた二資糧を円満にするので、更の度量の中に一回、集積すべきです。〔ヴァスバンドウの〕『資糧譚』(訳註13)にもまた、「今日私は、福德と智慧の資糧の何を造ろう、有情の益の何をしようと、菩薩は常に思惟する。」と説かれています。

資糧 : Accumulations

①仏道修行のかてとなる善根功德。②悟りの智慧の助けとなる仏道修行。

十法行 : the ten virtuous activities

十法 「十如是」に同じ。 (例文仏教語大辞典より)

十如是…一如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等で、これは法華経の梵本になかったものを、諸方実相の意味を明らかならしめるために、翻訳者鳩摩羅什が加えたものであろうとされる。これは一切法のあり方を十方面から眺めたものであって、原始仏教で一切法を無常・苦・無我などとして眺めたものと同じ趣旨のものである。 (仏教要語の基礎知識より)

四摂事 ; the four methods of gathering

四摂法(ししょうほう)…菩薩が人々に利益を与える四つの方法。人々を仏道に引き入れる四種の行為で、

- (一) 布施(物を施す財施・教を説く法施)、
- (二) 愛語(やさしい言葉をかけること)、
- (三) 利行(利益を与える様々な行為)。
- (四) 同事(他の人と同じ立場に身をおいて苦楽を共にすること)の四つ。**四摂事とも**。

(例文仏教語大辞典より)

三輪清浄 : the three spheres

布施に際し、施者と受者と施物の三つを空と観じて執着しないこと。(例文仏教語大辞典より)



関連文献

『ガルチェン・リンポチェ法話集1 修行の道』

p 4 より

生じていない菩提心を生じさせるための方便は、「心を転ずる四つの加行」を瞑想することです。まず、苦に気づく必要があります。二つめの生じた菩提心を減じさせない方便は、六波羅蜜を修習することです。そして三つ目の、ますます増大させるための方便は、金剛乘（密教）の修行です。

p 5

まず法の根本は、菩提心、慈愛です。密教とは、一切衆生の心は仏と同じなのだけれども、ただ衆生はそれを理解していないだけだ、と悟ることです。次に密教の修行の本質は、本尊です。本尊の修行を通して身語意の習気を浄化します。それがこの生で悟りに至るための方便です。本尊を観想することで身体の習気を浄化し、真言の念誦を通して言葉の習気を浄化し、菩提心を育てることで心の習気を浄化します。このような方便によって氷の塊を溶かし、二元の把握をすべて落とします。ですから秘密真言の本質は本尊であり、法の根本は無量の慈悲です。

p 6

さらに、仏法修行の本質はマハームードラーの修行であり、方便の本質は回向です。方便は、一切の仏の一切有情への慈愛です。ですから私たちの積むどのような善も、みな有情に回し与えます。このように他を思い他を考えることで、他と縁を結びます。これが回向の本質です。

p 2 1

ですから、毎晩寝る前に、「一切有情を利益できますように」と考えてください。毎朝起きる時には、一切有情の苦を思って、「おんまにぺねふん」と真言を唱えてください。このようにすれば他に何も修行しなくとも、身語意で為す行いすべてが自ずと善行となり修行となります。

p 2 2

心で「一切有情を利益しよう」と考えます。言葉について「私はすべて有情のために話そう」「おだやかなやさしい話し方をしよう」と考えることができます。このようにすれば、身体と言葉で為すことすべてが自ずと有情を利益します。そうすれば世俗の活動も福德を積むものになり、法の修行になります。それはあなたの心、あなたの志が清浄だからです。たとえ朝から晩まで普段の仕事をしていても、「私はすべてを有情のために為そう」と思うなら、どのような仕事のどんな行いも法の修行となります。それは菩提心の力によるのです。

『ガルチェン・リンポチェ法話集2 清浄の道』より

p 3 1

帰依に一時的におよび究極的な利益があると言われるのは、慈愛の故です。そもそも慈愛があって、布施、持戒、忍辱を実践します。その果として、三善趣の樂を一時的に成就します。健康な身体や財産や長寿などを得ることができます。そして瞑想と智慧と菩提心の力によって、最終的に菩提に至ります。これらの実践すべてに精進が必要です。

『ダライ・ラマ『菩提心の解説』より

p 254より

すべての現象は、単なる名前だけの存在であり、その自性によって成立し、存在しているのではない、という空の見解を主張する者たちは、虚無論を唱えているではありません。

何故ならば、空を主張する者たちは、世間的なレベルにおけるもののありようをあるがままに受け入れて、すべての現象は他に利害を与える機能を果たしていることを認めているのであり、その上で「自分と他者の立場を入れ替える」という菩提心を育む修行をしているのですから、虚無論者ではありません。

p 255

偉大なる資質を備えた仏陀や菩薩たちは、菩提心を育むために、「自分と他者の立場を入れ替える」という修行によって心を訓練し、六波羅蜜の方便の修行をされているのですから、涅槃に至っても、自分ひとりの寂靜の境地にとどまり続けることはありません。

そして、深遠なる空を、縁起の見解に基づく究極のものありようとして正しく理解し、瞑想するという智慧の力によって、輪廻にとどまることもありません。

このようにして、涅槃寂靜の境地にも、輪廻にも、どちらにもとどまることのない不住涅槃の境地を成就することができるのです。

すべての生きものに対して偏りのない心を持ち、彼らを利益しようという慈悲の心と同じ味を持つ行いは、功德の資糧を積むことになります。

そして、土台、修行道、結果という三つのすべての段階において、「すべての現象はその自性がない空の本質を持つものである」という空の理解は甘露の味であり、それと同じ味を持つ行ないをすることは、真如を理解する智慧の資糧を積むことになります。

今回の担当したところでは「自他との交換」を味わう時間ともなりました。まとめますと、慈愛の心で相手をみたら《潔く》自他の交換ができる、ということです。手放す、とも言えます。自分の存在のアピールではなく、まず利他から慈愛の心で相手を見る、がポイントと思いました。

学んでもすぐ忘れて失敗するのが正直なところですが、失敗しながらも何度も経験して、そのたびに繰り返し学びを思い出し「自他の交換」をし、自分も相手も苦と楽から解放されることを積み重ねる。それが段々に広がるように思います。

誰もが仏さまに包まれ所属している世界にいて精進できる時間を平等に与えられている、そう思うて見ることも慈愛の心からと思います。

今回の担当したところでは「自他との交換」を味わう時間ともなりました。まとめますと、慈愛の心で相手をみたら《潔く》自他の交換ができる、ということです。手放す、とも言えます。自分の存在のアピールではなく、まず利他から慈愛の心で相手を見る、がポイントと思いました。

学んでもすぐ忘れて失敗するのが正直なところですが、失敗しながらも何度も経験して、そのたびに繰り返し思い出し「自他の交換」をし、自分も相手も苦と楽から解放されることを積み重ね刻み込む。その輪が段々に広がるように思います。

誰もが仏さまに包まれ所属している世界にいて精進できる時間を平等に与えられている、そう思っていることができることも慈愛の心からと思います。私は日常の出来事からそれを学んでいるところです。

家族や友人、職場の中にもいろんな意見があります。

きっとどちらが正しいと主張するのではなく、自他の交換で、まずは慈愛の心を持って「私」が潔く引き下がって、相手を認めることから協力しあえるし、それこそがもともと目標の一致ですし、そうしていると、いつの間にか人々とともに精進していくのではと思います。

家族や周囲の人々と仏さまの中で修行をしている、そう思いながら日々修行ができることが、慈愛の中で生きていけることが、とてもとても有難いです。この生を無駄にすまいと思います。

アドラー心理学と仏教へお引き合わせてくださった野田先生に心から感謝いたします。